

## 郁達夫における外国思想・文化の受容

胡 金 定

郁達夫は今世紀の初めに中国文化と外国文化の交流の最中に文学創作活動に入った中国現代作家である。中国の「五四運動」<sup>1)</sup>前後の思想解放運動時代において第一世代の現代作家たちに幅広く外国の思想や文化を受容する機会が与えられた。しかし、それは作家自身の生活経験や創作の方針の違いにより、それぞれ自分の思想や主張に合致した外国の思想及び文化を選択して取り入れられたのである。郁達夫は「五四運動」前後、自身に置かれた独特な生活体験で外国の思想及び文化の影響を受けた。1913年、少年の郁達夫は長兄と一緒に日本留学に来た。それから10年近く日本で過ごした。1919年、「五四運動」（「新文化運動」ともいう）が起こった際、郁達夫は日本滞在中であったので、直接この新文化運動を経験することができなかった。だが、彼は隣国の日本で「五四運動」の余波を感じた。このような文化環境に置かれ、郁達夫の外国思想及び文化の受容は次のような特徴が見られる。

その一、自由解放の大正時代において、郁達夫は広く西洋の進歩的な思想や文化に関する書物を大量に触れることができた。彼は『戦後敵味方の文芸比較』<sup>2)</sup>の中で、

日本での留学時代は、ちょうど明治維新の大業が完成した後で、各業界が隆盛におもむく時期であり、日本では数百年間で見られない国家の繁栄の頂点に達している。その時、（中略）欧州の自由主義思想及び十九世紀文化の結晶、すなわち自然主義の中において最も優れた作品が大量に日本に紹介された。日本近代文学の黄金時代は、もちろん明治時代の末期から大正時代までの数年間を除いて、その後は恐らく永遠にその時代を凌ぐことは不可能であろう。

郁達夫は日本に滞在していたので、中国国内の同時代の人と比べて、彼はいち早く西洋の新しい思想や文化を吸収することができたのである。

その二、大正時代、外国思想と文化は洪水のように日本に紹介され、日本では民衆主義や自由主義等の思想の昂揚、従来の諸制度、諸思想の改革が試みられ、郁達夫にも新鮮さと衝撃を与えた。彼の「雪夜——自伝之一章」<sup>3)</sup>を読むと、その一端を知ることができるであろう。

男女の性解放の新時代は、早くも東京の上流社会、とりわけ知識階級、学生たちに波及した。（中略）イプセンの問題劇、エレンブルグの恋愛と結婚、自然主義派文人の醜悪暴露論、刺激性に富んだ社会主義の男女の性観等、これらの問題は一時的に洪水のように東京に押し寄せてきた。しかし、私は、清らかな心魂で、生まれつきの孤高を持する性格で、

感情が脆く、主意はしっかりしていない異郷の旅人がこの洪水の泡になり、二重三重に押し寄せられ、水流のうずまきに溺れ、意気消沈した。

この社会に対して彼は更に次のように日本社会を見ていた。

当時の日本は、政治が小康状態に入り、思想が縦横に交錯して乱れていた。国民は古い伝統を破壊しなければならないと感じていたが、人々が安心して暮らせる新しい思想はまだ見つからなかった。だから、普通の神経過敏な思想を持つ青年は、虚無者に流され、華嚴大滝に投身自殺したものがいて、意志が弱いものは、頹廢派の悪徒になり、目の前の官能の満足に甘んじていた<sup>4)</sup>。

その三、大正日本の活気のある政治・文化の中に置かれて、郁達夫は自国の混沌衰退、また日本で屈辱を受けた経験から自分の思想に深刻な矛盾が生まれた。そのため、かれは、

日本で私ははじめてわが中国が世界競争の中の地位を知った<sup>5)</sup>。

国際地位の不平等を痛感して、世間に訴えようとした郁達夫は、日本に滞在したことを振り返り、失望の意味を含めて次のように述べている。

私の抒情時代は、あの生活が荒れすさんでいた残酷な軍閥独裁の島国で過ごしたのである。故国の陸沈を目にすること、異郷で屈辱を受けたこと、感じたこと、経験したことのすべては、総括してみると失望しないことは一つもないし、悲しまないことは一つもない<sup>6)</sup>。

その四、中国国内の「五四運動」において提唱された科学民主主義による封建主義に反対する潮流は、破竹の勢いで展開していた。思想解放、人間を尊重する世論は主流になった。祖国の急激な社会変化が郁達夫に希望を持たせるようになった。

「五四運動」が社会に与えた影響は、文学に与えた影響よりも遥かに大きい。(中略) 例えば、封建思想の打倒、デモクラシーの提唱、民族解放の主張等などは、世界を風靡した当時の社会傾向であった。中国は「五四運動」以降から、世界の呼吸の中樞神経系統に仲間入りし、世界が動くと、中国は忽ち敏感な反応を呈する。(中略)「五四運動」は、文学に新しい意義を齎したのは、自己発見である。ヨーロッパ、アメリカ各国の自己発見は、十九世紀の初期であったが、中国は伝統の鎖国主義の束縛により、七八十年も遅れた<sup>7)</sup>。

彼は中国の思想解放の必要性を引き続き力説した。

「五四運動」の最大の成功の第一が「個人」の発見だといえる。昔の人は君子のために生きる、道のために生きる、父母のために生きるなのであったが、現在になってやっと自分のために生きることが分かった。もし私がいなければ君子が存在するのか？ 道は私に適

合しなければ道とは言えるのか？ 父母は私の父母である。もし私がいなければ、社会、国家、宗教等は存在するのか<sup>8)</sup>？

上記のように郁達夫は、異国という独特な文化環境に置かれ外国の思想や文化を受容したと考えられる。大正時代の思想解放、自由な社会風潮は、郁達夫が西洋の新しい思想を吸収するのに絶好な条件を提供した。また、混沌や衰退している祖国（郁達夫は「弱国」という）を背負って異郷で屈辱を受けたことが原因で、自分が非常に苦しんでいる状況で新しい思想を求めている。一方、中国国内の「五四運動」前後、人間の価値を肯定し、個性解放を標榜する社会風潮に同調するため、郁達夫は積極的に外国の進歩的な思想を求めたと考えられる。更に、当時の日本にはさまざまな外国思想の書物を翻訳され紹介されたために、郁達夫に選択の余地を与えたことは忘れてはならない。これらの文化環境と社会要素は郁達夫の外国思想や文化の受容に決定的な影響を与えたのであると思われる。

少年時代は異郷に滞在し、外国思想や文化に興味を持つようになった。また、郁達夫は経済学を専攻にした留学生ではあるが、選択できる新しい思想が多く紹介されたため、哲学、政治学、経済学、社会学等の理論書を熟読したうえで、自分に共鳴できる思想や文学主張を取り入れたわけである。多くの書物を読破した郁達夫の目に留まったのは、二人の西洋思想家であった。その一人は、ドイツの哲学者で、実存主義の先駆者。キリスト教論理を弱者の奴隷道徳とし、強者の自律的道徳を説き、また、伝統的形而上学を幻の背後世界として否定し、神の死を告げたニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche)。もう一人は、同じドイツの哲学者で、あらゆる外的権威を排して、もっぱら自我の権威を説く徹底的な個人主義から無政府主義に到達することを主張するシュティルナー (Max Stirner) である。郁達夫は『文学概説』に「極力に個性の尊重を主張」する「新ロマン派」の哲学者ニーチェとシュティルナーを高く評価している。「五四運動」の時期、ニーチェは中国にも広く紹介された西洋の思想家の一人である。ニーチェの「すべてを再評価する」、「すべての権威を否定する」、「愚像を破壊し」、「個人意志」を強調する思想主張は「五四運動」の主張と合致したため、広く知られている。中国現代文学の大家魯迅や郭沫若等もニーチェの思想に傾倒しその影響を受けた。郁達夫も自ら書かれた『断残集』の序文でニーチェは私が「普段愛読した作家の一人」であると言っている。ニーチェはその後も、郁達夫にとっては魅力のある思想家であり続けた。郁達夫は自らニーチェの女の友人 (Madame O. Luise) 宛の手紙（「超人の一面」という題名で公表した）を7通中国語に翻訳した。彼は訳者後記に

彼は（「ニーチェのこと」筆者）冷酷で孤高の哲学者の一面を持っている。しかし、彼のこのような優しい心情は手紙の中に見られる。

郁達夫はニーチェの名著『ツァラトゥストラかく語りき』について高く評価している。

これは気違いのような哲学者のうわごとみたいな傑作であり、しかも、神妙で飄逸としている。我が国の「楚辞」に類している。まるで絶好な散文詩のようだ<sup>9)</sup>。

ニーチェの思想に傾倒した郁達夫は、ニーチェの経歴を材料にして小説を創作する計画があったことが、1932年、上海から杭州に移り住んだ日記の中に書かれていた。

今度携えてきた書物は、ドイツの哲学者 Nietzsche のものが多かった。彼は薄命の天才でその経歴には尊敬するところがある。その故、彼のことを詳しく研究して、彼を主人公にして小説を書こうと思っている<sup>10)</sup>。

とはいえ、とうとうこの執筆計画は実現しなかった。実現しなかったのは、病氣療養のため杭州に来たのが第一の目的だと挙げている。だが、ニーチェの小説を書く願望は捨てたわけではなかった。そのため、郁達夫は半年経過してから、自分が編集した『断残集』の序文に再度このことを取り上げた。

薄命のニーチェは、中国に一時的にセンセーションを巻き起こしたが、三十年経ってから、彼の作品は、単行本としての完訳がまだ見られない。へんぴな片いなかにいて、気遣いの哲学者の経歴を小説にする雄心はいつも持っているが、歳月が経ち、瞬間にして時代は既に超人を必要としなくなり、哲学を必要としない世紀に変わってしまった。

郁達夫はドイツのもう一人の哲学者シュティルナーにも心酔していた。シュティルナーは無政府主義論者であり、彼は『唯一者とその所有』及び他の著書の中で、大胆に唯我論を打ち上げて大段的に宣伝した。シュティルナーは次のように主張した。

私は私の権利の所有者と創造者であり、(中略) 私自分以外、私は他の権利の出所とは認めない。神様、国家、自然、人、神権、人権等にしても認められない<sup>11)</sup>。

シュティルナーは、さらに唯一無二論を展開した。

私は神様に興味がない。人間にも興味がない。善のこと、正義のこと、自由のこと等にも興味がない。私が興味のあるのは、なにが私であることだけ。これは普通のことだけではなく、唯一者である。まるで私が唯一者であるようだ。私にとっては、私自分以外、ほかのものは存在しない<sup>12)</sup>。

シュティルナーのこの主張に共鳴した郁達夫は、1923年『自我狂者シュティルナー』という短文を書いて、中国の読者にシュティルナーの経歴と哲学思想を紹介した。文章の中に次の一節がある。

「自我こそがすべてであり、すべてが自我である」。個性の強いわれわれの現代青年は、誰でもこのような自我拡張 (Erweiterung des Ichs) の信念を持っている。Max Stirner の哲学は、実に近代の徹底した「唯我主義」の泉である。彼はニーチェの超人主義の師匠である。

Max Stirner は、人道を認めない。神性を認めない。国家社会を認めない。道德法律を

認めない。彼が最も反対したのは愚像である。それは理想或いは何にしても、要するに、自我はいつも自我の中に存在する。すべてのものの前に屈服してはならない。(中略)彼の主張は、要約すると、次のようになる。自我の要求を除いたら、すべての権威は存在しないのである。私は唯一者であり、私以外は何もない。だから、私は私自身に忠誠心を尽くせばよい。私自身のすべてを持っていけばよい。それ以外のすべてには関心をもっていないのである。

1928年まで、郁達夫はシュティルナーの著作を愛読していた。この年の6月3日の日記に、「魯迅を訪ねに出かけた。Max Stirnerの本を一冊返した」<sup>13)</sup>と記していた。シュティルナーはニーチェと同じく長期間にわたって郁達夫に影響を与え続けていた。実際にはシュティルナー(1806~1856)とニーチェ(1844~1900)とは同じ時代の哲学者ではなかった。二人の思想も違いが見られる。シュティルナーの「利己主義」は上昇時期の資本階級の個人主義の意図が理想化したものである。ニーチェの「哲学」は同じ階級の没落時代の産物だと言えよう。二人の思想の違いがあるにしても、郁達夫は二人の共通点を見いだして、吸収したのである。シュティルナーとニーチェとの共通点は、権威と愚像に反対し、そして、否定すること、また、個人の意志及び自我価値を強調することである。だから、郁達夫は「極力個性の尊重を主張」する「新ロマン派」の哲学者と評価した。二人の思想の社会的な意義について、郁達夫は次のように述べている。

彼らは現実の生活に対して、目の前の事実を、どうしても一概に抹殺することはできなかった。しかし、かれらはこの環境の中において、きっぱりとかれらの個性の力を用いて戦っていた。大地を踏み、大地を征服しようと思っていた。この表現の傾向が、人生に与えた良いことは、少なくとも三つあると言える。第一、人生内在の能力の覚醒を促して、宿命観に圧倒された人類の自由意志は、これで解放された。第二、自己の尊厳と自由の結果を主張することにより、他人の個性や自由や尊厳なども容認するようになる。第三、人類の生活見解が活発になってきた。このいくつかの影響と反動が役割を果たしたため、現代人の生活は新しい方向に繰り広げられていった<sup>14)</sup>。

郁達夫はシュティルナーとニーチェの思想から中国「五四運動」と合致した反封建権威、個性解放を強調する時代精神・思想を取り入れた。郁達夫はシュティルナーとニーチェの思想を選択し、そして、吸収したのは、同時代の中国社会の需要と郁達夫自身が置かれた文化環境と密接な関係があると思われる。

異国での経験及び独特な文化環境に置かれた郁達夫は、ドイツの哲学者の哲学思想を受容したばかりではなく、西洋の文芸理論家の文学思想も受容し、自分の文学主張を大きく転換させた。かれの初期に書かれた文学理論の論文を読むと、明らかになる。

Matthew Arnold にしろ、Walter Pater にしろ、Thomas Carlyle や H. A. Taine や

G. E. Lessing や Belinsky や Georg Brandes など誰でも、もし目下の中国に生まれたら、恐らく現在の新聞雑誌紙面で文芸評論を取り仕切っている偽評論家たちは、みんな便所のウジと食べ物争いに行かなければならなくなるだろう<sup>15)</sup>。

ここに挙げた Matthew Arnold, Walter Pater, Thomas Carlyle はイギリス, H. A. Taine はフランス, G. E. Lessing はドイツ, Belinsky はロシア, Georg Brandes はデンマークの文芸理論家である。郁達夫は早くからこれらの西洋文芸理論家の著作を読んでいたと窺うことができる。彼はこれらの文芸理論家から啓発され、文芸理論に関する『小説論』や『演劇論』や『文学概論』等の論文を書いた。これらの論文の中に外国の参考書を多く記述している。この点からも、郁達夫が多くの西洋文芸理論書を読んだことを証明することができる。

西洋文芸理論の影響を受けた郁達夫は、中国の伝統文学概念と違った見方を形成した。彼は、中国古代文人が「文学」に対する解釈を持って「無理やりに現在我々が言う“文学”という二文字に当てはめるなら、無理が生じる」と言って、「現在我々がいう“文学”という二文字は“Literature”の訳語である。既に外国の意味を入り交じっている。これは自然に書籍も外国のものを使用しなければならなくなったのである」<sup>16)</sup>。時代が新しい思想を必要とすることを強く説明してから、中国伝統的な文学概念を批判した。

文学概念の更新により郁達夫は明らかに文学の教化作用に反対するようになった。中国伝統的な文学概念は、「文以載道」、「代聖賢立言」等である。つまり伝統的な、文学を「聖人之道」にして、文学の教化作用を強調することである。しかし、郁達夫はこの概念に対して、次のような譬えを挙げて「文以載道」、「代聖賢立言」の中国伝統的な文学概念は既に時代遅れになっていることを立証している。時代にふさわしい思想や文学概念を樹立するよう訴えている。

オリシスのマース (Muse) は、人の女中ではなく、もし必ず彼女を手段として使用するなら、美人局を設置して、次々と巧みに仕組まれたトリックを使う。これは使う人の墮落であり、文芸の職務がこうすべきではないのである<sup>17)</sup>。

郁達夫は、文学者が作品を創作するに当たって、美の創作に力を入れなければならない。美の創作を捨てて教化の「勸善書」を書いてはいけなないと考えていた。彼は

成功した作品なら、読者に作品の美の中に恍惚として読んでもらい、愉快に感じてもらったり、憂鬱に感じてもらったりして、読後に道德風化等の厳しい問題を連想させる余裕を残してはいけな<sup>18)</sup>。

彼は『小説論』という論文の中で、次のように語っている。

小説は出来栄えがよく、美学も優れるならば、小説の目的に達したと言える。社会の価値や論理の価値については、作者が創作段階では考える必要がない。しかし、實際上全ての美の作品は、社会の価値もきっと高いのである。

郁達夫は文学を「聖人之道」にすることに反対すると同時に、積極的に創作の主体が個性と自我意識の表現手段であることを主張していた。郁達夫は何回も「作家の個性は、どうしても作家の作品の中に残さなければならないのである」と強調していた。郁達夫にしては、作家が自分の個性を残すもっとも重要なことは作品の創作主体そのものを最優先にすべきである。つまり作家の自分の生活経験と喜怒哀楽の情緒を表出しなければならない。だから、彼はフランスの作家アナトール・フランスの「文学作品は、すべて作家の自叙伝である」という有名な言葉を好んで愛用していた。そして、彼は論文にはもちろんのこと、講演の際も繰り返してこの言葉を取り上げる。この文学主張は彼の文学思想の核心になっている。彼は、『五六年来創作生活的回顧』の中にこの言葉を再度引用した。

「文学作品は、すべて作家の自叙伝である」という言葉は、最も正しいものであると考えている<sup>19)</sup>。

その後、彼は更に「『中国新文学大系・散文二集』導言」で補足説明をしていた。

現代散文の最大の特徴はそれぞれの作家のそれぞれの作品に表している個性である。それは昔のどの散文よりも強いのである。古人が曰く、小説は多少自叙伝の色彩を帯びるので、小説の作風或いは人物から作家自身の写実を窺うことができる。しかし、現代散文は更に自叙伝の色彩が強くなって来る。我々は現代作家の散文集を巡ってみるとしたら、これらの作家の家系、性格、嗜好、思想、信仰及び生活習慣などが我々の目の前に生き生きとして現れてくる。このような自叙伝の色彩は何であろうか。これこそ文学の中の最も貴い個性表現である<sup>20)</sup>。

郁達夫は自叙伝の色彩がつまり作家の個性の表現であると考えている。彼のこの文学主張は彼の哲学思想と密接な係わりがあり、人間自身の価値を十分に重視すればこそ、人間の個性を描き出す自叙伝がその重要な地位を獲得することができる。異郷で外国文化を十分に享受できた郁達夫は西洋哲学思想の影響を受けて、愚像や権威を否定し、自我尊重を強調する哲学思想を形成した。一方、文学においては、中国の伝統的な「文以載道」、「代聖賢立言」の文学思想に反対し、個性表現を主張する文学概念が作りあげられたわけである。郁達夫のこのような哲学思想と文学概念は中国の「五四運動」前後の時代の要求と一致している。郁達夫は異国という独特な文化環境で西洋の新しい哲学思想及び文学概念を受容して、郁達夫らしい文学概念が生まれた。それは「文学作品は、すべて作家の自叙伝である」である。彼のこの文学概念は中国現代文学の中で異色な存在となり、中国文壇に新風を吹き込んでいったのである。

〈注〉

- 1) 第一次世界大戦後、パリ平和会議における山東問題の措置に憤慨した北京の学生約五千人は、1919年（民国8年）5月4日、全市にわたってデモ行進を行い、政府に対して平和条約批准の拒否、責任者の処罰を要求した。これに端を発して全国的な排日運動・政治運動に発展した。学生の運動

- は労働者をはじめとする国民諸階級層に及び、共産党の成立が準備され新文化運動の導火線となった。この反帝・反封建の新文化運動を「五四運動」、「五四文化革命」、「新文化運動」等という。
- 2) 「戦後敵我的文芸比較」は、日刊新聞の『星洲日報・晨星』1939年5月29日に掲載された。
  - 3) 「雪夜——自伝之一章」は、雑誌『宇宙風』第11期に掲載にされた。
  - 4) 郁達夫は親友の孫百剛が倉田百三の戯曲『出家とその弟子』を中国語版の『出家及其弟子』に翻訳した中国語版の序文に書いたものである。この本は、1927年10月に創造社出版部から出版されたものである。
  - 5) 注 3)と同じ。
  - 6) 郁達夫は『懺余独白』の中に、「抒情時代」と称する。
  - 7) 「五四文学運動之歴史的意義」(「五四文学運動の歴史的意義」)は、『文学』第1巻1期に刊行された。
  - 8) 「『中国新文学大系・散文二集』導言」から引用した。
  - 9) 「德国以後的德国文学挙目」(「ドイツ以後のドイツ文学を見る」)は、『現代文学評論』1931年10月号に掲載された。
  - 10) 浙江文芸出版社 1992年12月出版の『郁達夫全集』第12巻「日記篇」の「滄州日記」の10月7日を参照。
  - 11) 『馬克思恩格斯全集』(「マルクス・エンゲルス全集」人民出版社出版)第3巻第366頁から引用して日訳したものである。
  - 12) 全増假が編集長を担当した『西方哲学史』(下冊)1985年、上海人民出版社出版。第339頁から引用して日訳したものである。
  - 13) 浙江文芸出版社 1992年12月出版の『郁達夫全集』第12巻「日記篇」の「断篇日記四」の6月3日を参照。
  - 14) 『文学概説』,1927年、上海商務印書館出版。
  - 15) 「芸文私見」は『創造季刊』第1巻第1期に刊行された。郁達夫は当時の中国文壇で活躍していた文芸評論家に不満があり、外国のことは全然知らないのもっと外国の思想や文学理論を勉強してもらいたい、もし勉強しなかったら、今のままでは全く存在する価値がないと言っている。
  - 16) 注 14)と同じ。
  - 17) 「『茫茫夜』発表之後」(「『茫茫夜』刊行された後」)は、1922年6月22日の『時事新報・学灯』に刊行された。
  - 18) 「我承認是‘失敗了」(「私は‘失敗したこと’を認めた」)は、1924年12月26日の『晨报副刊』に刊行された。
  - 19) 「五年来創作生活的回顧」(「五年来の創作生活の回顧」)は、『文学週報』第5巻11,12号合冊に刊行された。「文学作品は、すべて作家の自叙伝である」という主張は、フランスの作家アナトール・フランスの有名な言葉ではあるが、郁達夫はこの言葉を借用して自分の文学観にしたのである。だが、読者は「自叙伝」に対する理解が郁達夫の主張とずれが生じた。郁達夫の作品は全て郁達夫自身の伝記だと考えていた。その故、郁達夫はこのような誤解を正すために、「『茫茫夜』発表之後」に、「私は普段小説を書く時、架空の手法をあまり使用しないが、私の事実は Wahrheit の中にあり、いささかの虚構も Dichtung の中に収めている。主人公の一挙手一投足のことは、完全に私自身の過去の生活ではない」と改めて釈明した。
  - 20) 「『中国新文学大系・散文二集』導言」からの引用。